

「小津安二郎の映画」を観たことありますか。

先日実施された本県の高校入試。国語の出題で使われたのが、出口治明氏の「読書」に関する文章。氏によると、本を読む目的は二つ、実務を知ることと、教養を身につけること。教養とは毎日の生活に困るものではないが、世界の見方が広がったり、深い洞察ができるようになることを指摘し、教養を身につけることが「思わぬところで役に立つ」と出題文は締められている。この春に入学する中学生へのメッセージとしてもおもしろいと思いましたので、今回は「教養」について書きたいと思います。

出口氏は1000冊以上の本を読んできたそうですが、ほとんどがすぐに何かに役に立つものではなかったそうです。今の社会はすぐに役に立つものばかりを重視する風潮が強いので困りますが、何より有益性ばかりを重んじる価値観は、人間関係や日常生活にさえ悪い影響を与えるのではないかと私は危惧しています。

さて、映画「イエスタデイ」（2019年公開）は、売れないシンガーソングライターがビートルズのいなかった世界に迷いこみ、唯一彼らのヒット曲を知っていることで超売れっ子になるという奇想天外な内容ですが、思わずニンマリする場面がいくつかあります。例えば、主人公がガールフレンドに「俺が64歳になっても必要としてくれる？」と尋ねますが、もちろん、これはビートルズの楽曲「When I'm Sixty Four」の歌詞からの引用です。また、医師が主人公に語る「君の父さんは私の最初の患者だった。今の私があるのは友達の助けのおかげ」は「With a Little Help from My Friends」の引用。随所にこのような引用があるのは、ビートルズの曲が「聖書」や「シェイクスピア」と同レベルで英語圏の観客にとって、「教養」になっていることを物語っています。最近読んだ阿刀田高の小説。病弱な姉に何でも譲るように仕向けられてきた女主人公が、縁談話まで横取りされる場面で、姉に「あたしも一生の思い出に結婚してみたい」と言い出され、心の中で「お伊勢参りじゃあるまいし」と毒づきます。江戸時代に猫もしゃくしも行きたがったのが伊勢神宮。この参詣ブームは落語などにもよく出てくるのですが、それを知らないと、この台詞の面白さはいまいち伝わらないわけです。ちなみに、作家の井上ひさし氏が、英語圏の人たちにシェイクスピアがあるのと同様に、日本人にとっての落語の存在を重視する発言をしていたと思います。ともかく、ロックも映画も小説も落語もどれもすぐに役に立たない意味ではまさに教養なわけです。ただし、出口氏が言うとおりの、「思わぬところで役に立つ」こともあると思います。何より、自分の考えが一番正しいと思うのは人間の性ですが、「正しくない」考えの人を頭ごなしに非難攻撃するのは正しくありません。そうした振る舞いを押さえつけるのが、やはり幅広い価値観につながる「教養」です。学校でも教養を重んじなければならないのは、当然だと思います。

フランスでは小中高ともに「多様な映画」を観せる映画教育を行っているそうですが、そこでは小津安二郎氏（1963年没）の映画や宮崎駿氏のアニメも上映されているそうです。フランス人が観ているのに、日本人が小津映画を一本も観てないとしたら、どんなものでしょう。付け足しですが、スティーヴン・ジェイ・シュナイダーの総編集「死ぬまでに観たい映画1001本」にも小津映画は3本入っています。私もその内の1本はまだ観てないので観たいと思います。来年度は還暦の年齢、急がなければ！？

令和6年2月13日 大村城南高等学校長 中小路尚也